雪深き弥栄より

―その二―

＝資材運び　才一、二便　弥栄のそこきの図＝

1月末に2トントラックが大阪と弥栄を2回往復した。山と積まれた荷物はベニヤ、材木、たたみ、たんす、などなど。

弥栄はやっぱり雪でした。冷たくきびしい雪でした。その中を村の人たちが黙々と道をなおす工事をしてました。あたりはしーん。耳がいたくなるほどしずーか。その静寂をつき破るのは山師のバカ声

「コラー！ナューラ！バァーロー！死んじまえー」

山師は確実に生きていました。犬のナューラも山師に負けず確実に生きていたのです。

いったい何を食べて生きているのやろ。畑が雪におおわれてからすでに2ヵ月。取りのこした大根もキャベツもすべて雪の下なのです。ここだとねらいをつけて冷たい雪を掘りおこすとなにもなかったときのむなしさ。悪戦苦闘したあげくやっとみつけた小さな黒ったキャベツ。とにかくそれでのもうとごはんをつくりナューラとわけ合って食べるのであります。しかしご心配なく。村の人とすっかり顔なじみになり、また真剣な卵売りが好評であれをかい、ご近所様から自家製豆腐、干柿などのお恵みをぶんどっているのであります。そしてそれを一表などにして生きがいとしているのです。新入りのナマへ小猫ごはもっぱら豊富なネズミにより完全自給。にわとりも確実に卵を産み続けていました。

とにかくみんな生きていました。そしてなにより雪の下では黒い大地が生き続けていたのです。いっせいに緑の芽をふく日を、私たちが種をまく日を、部落のみんなが帰ってくる日を待っていたのであります。

欲望の解放に向けて
―発想の転換を―
―出稼ぎコミューンからの教訓―

1月末給料がはいってきました。

私は内転の仕事で8日間働き、1万3千円、男子の蛍光灯拭きの仕事で2日間働き、やはり1万3千円の収入がありました。お金を受けとるとき、奇妙な感じがしました。内転の仕事は8日間決して手をぬいて得た金じゃない。蛍光灯拭きの仕事こそ慣れや体力の面から男子にくっついて仕事をしたという感があります。

現在、収入は内転、蛍光灯と一つずつまとまってはいってきます。そしてグループ毎に、前もって記録してあった各人の労働時間で計算し、各人に分配するシステムをとっています。各人は受けとった金からこれだけは必要だという額を手許に残しあとはカンパという形で共同体会計に入れています。

男女の収入の差は、今までの男と女の生活の形のように男子が生活上の主なる部分を稼ぎ女子はそれを補うといった形が、再びこのへ出稼ぎコミュニン〉でも生じるのではないかという感念をもたせました。また、個人的生活部分で貧富の差があるのではないかという疑念もありました。

共に問題点は相手が視えていないことにあるのだと思います。この都会で、弥栄よりも個人の動きは増え、自分の労働時間は、即、自分の収入へつながるというカンパ形式は、へ出稼ぎコミュニン〉の場をいっしかアルバイトをしやすいための共同生活の場へと落としめていったように感じられます。へ今日は休みたい〉と云うとき、休むことによる利害は自分にあるのだから勝手にしていいではないかという気持があったことも否めません。個人的休日の過ごし方にしろ弥栄に居たときほど、他メンバーの仕事をしている姿は頭に浮かんでこなかったように思えます。

具体的解決策としては、収入は一括して共同体会計へ入れ、そこから小遣いをとるといった形、請求制度が一番良いと思いますが、今までは請求の仕方の困難さからその形はと

れていなかったというのが現状です。

2.

請求制度にしたところで今までと同じように、自分がこれだけは必要と思う部分を請求しお金をとるので、何も変わらないではないかと云います。けれど、その際各人の暗黙の了解であった必要と判断された部分が全員の前に提示されます。そうまでしなければ意訳の共有というのはできないのかとも思いますが、それが現実です。請求制度をとるかどうかにしろ、勤労意欲がそがれると云う人、かえって自分の金ではないという意訳をもてあまり仕みなどとれなくなると云う人反応はさまざまです

請求制度の問題点は次のようになると思います。自分の欲求を公開することのこわさ。個々人の必要額の差。嗜好品のちがい、また、自動車学校で教程を一回で終えることができずに他の人よりも金が必要になる、そのとき自分は他の人が使っているだろう嗜好品などに使える部分を削って、自動車学校の方に金をまわさねばならないのだろうかとの懸念、そして必要額を決めるときの規準、意訳の差などがあると思います。

必要額を決める際に重要なのはへ欲求の解放〉だと云います。自分にとってこれが当然必要であると思っていることのひとつひとつをホントにそうなのかどうか、もう一度見つめ直すことだと思います。それが、この共同体運動をそれまでのシステムを手直しするだけであった社会主義運動と区別する点だと云います。

3.

この問題は現金収入の多くはいってくるへ出稼ぎコミュン〉で、まだ今は、と云うことなく起こってきました。弥栄では自分で使いたい小遣いは個人的借金とか、弥栄を出て他の所でアルバイトをして稼ぎその金で埋る、という了解事項で済まされていました。各人のどろどろとした欲がぶつかりあうこともなく、見直すこともなく、問題を切り棄てた閉ざされた空間として弥栄は在ったと思います。切り棄てていた原因である弥栄の経済的自立を考えるとともに、それを構成する各人もが出稼ぎの三三版をしないですむ状態、各人がどっぷりと頭の先まで浸っている生活の場となる状態を見つめ、そのときへの訓練として、あと1回しかない2月の給料日に請求制度の実験をしてみたいと思います。

内面はともかく、表面上は所謂世間一般に認められた道というンか、ちゃんと大学出てやな、十字屋ちゅう変な自営店で働いてたわけや。ところが一緒に働いている奴らが完全に企業のエエ子になってしもとんねんな。

こんなことあったわ。寮の食堂に置いたる牛乳が森永やねん。「他にも銘柄があるのに、わざわざ殺人企業森永の牛飲まんでもええやろ」と、ちょっと昔のことやろ。」と反対する者がおって、それ聞いて賛成しかけとった奴もあわてて反対に回ってしもて……。ともかくひどいとこやった。

エエカッコして行ったら、企業内での個人的運動に限界感じて……てな感じになるんやろけど。ほんまの気持ちはコオレもこのままズルズルここに居たら完全にダメになってまうちゅう危機感やったんや。皆、企業の日本的なぬるま湯的甘さにドップリつかってもって、もうよう抜け出せへんのや。そらあんた、口クに仕事せんでも金くれるし。云いたいことも云わんとおとなしいしてたら、わんな楽なとこない。まあ、そんな訳でやめてこっち来たんや。

いろりばた

☆出稼ぎコミューンも大詰めをむかえてこむつなは大忙し、てんやわんやしながらつくりました。

☆「コミュニヒロバ」今号印刷す前に山師登場!出稼ぎ組と激的?な対面シーンが展開されました。「山師よかったね、雪に押しつぶされないで……!」

☆最近こむつな塾に異変?がおこりつつあります。毎週水曜日には、塾の先生たち全員の顔がそろい、話し声がひびきわたります。

☆二月二四日(日)に出稼ぎコミューンの総括を行なう予定です。弥栄へ戻るまであと2週間ほど。まだこむつなを訪れていない人、お早めにどうぞ、待ってま〜す!

第4回コミュン学校 開く

去る一月八日、日本協同体協会において、長谷川進、渡辺一衛両氏を招いて「コミュン学校」を開いた。全員で二十五名の参加があり、椅子ではこぼれる人がでてくるので、床の上にあぐらをかいたり、机によりかかったりして円陣を組んで始まった。簡単な自己紹介のあと、弥栄の現情についての話に入り、次いで両氏に次のテーマの下に話をして頂いた。

「ランダウアー、ブーバーの思想から　何を学ぶか」　長谷川　進氏

「中国・リ連型社会主義とコミュン型社会主義」　渡辺　一衛氏

「ランダウアー、ブーバーの思想から　何を学ぶか」

ランダウアーは、スティルナー以後最大のアナキストといわれるが、今まであまりとりあげられることがなかった。彼自身は「アルードンに負うところ多い」と言っている。彼の出していた雑誌「ゲデーダンケン」「アリスト」にアルードンを紹介し、いわば、アルードンの建設的な側面をランダウアーが発展させたといえる。

クロポトキンの「相互扶助論」や「田園・工場・作業場」「フランス革命からの手紙」などを訳し、その思想の影響をうけている。また、トルストイの平和主義・非暴力主義的影響もみられる。

ブーバーはランダウアーの思想を社会哲学の流れの中に位置づけた。

・ランダウアーの活動

学生時代ヒューマニズム・民族主義・ニーチェの影響をうけ、ドイツ社会党に加入、機関紙「ゲデーダンケン」「アリスト」の発行に関わる。

一八九三年ー社会民主党からアナキストが分離　アナキストのリーダー格として新聞の発行を続ける。

アナルコ・サンジカリズムの運動に関わる。

「オニ期産業活動」労働組合とは別に、資本主義からの離脱としての生産・消費協同組合」をめざした。

二十世紀ードイツ中世の神秘主義思想家の研究生活にはいり、ベルリンの文学青年の団体「ノイエ・ゲマインシャフト」に加わる。

「分離をとおして共同体を」を発表し、共同体思想を明らかにした。

「アナーキーな社会は将来のことではなく現代の要求の問題ではなく生活の、固有化の問題ではなく新しいホルク（「民族」と訳すが）の問題である」

「新しいホルクの建設とは、大衆からきり離された自立した人々を新しい団体に結成することである」

一九〇七年ー「ホルクと土地」を発表し、後にランダウアーを中心にしたグループができる。

一九〇八年ーコミューン建設を目標に、社会主義同盟が発足、ドイツスイスで十八グループ約二百人が

加盟

第一次大戦―反戦運動を出発にする

一九一八年―バイエルン革命に関わる。

一九一九年四月七日―レーテ共和国が誕生。ランダウアーは政府の閣員教育担当となる。しかし、レーテ共和国は一週間しか続かず、軍隊がはいり、共産党がとってかわって共産党の政府ができた

五月一日、ランダウアーは逮捕され、二日殺された。

・ランダウアーの思想の特徴

①社会主義の精神的要素を中心に据えみる

②方法的個人主義、個人を基本とする考え方である。

権力の問題を階級からでなく、個人の問題からとらえ、制度の変革よりも精神の変革をめざす。

「国家は一つの関係、態度であるだから、国家を破壊するためには、今と別の関係、国家を必要としない関係をつくることが必要である」

③非暴力主義

④国家権力の根源を民衆に求めている

民衆が認めているから国家権力が有効性をもつ

⑤民族主義の傾向がある。

「ホルク」とは歴史的な精神へ共同体精神で結ばれた、ネイションである

⑥レーテ思想

レーテ運動の三つの要素―①共同し和在されている社会者とのつながり、②ラディカルデモクラシーの思想、③民族主義革命的なものがたしかにランダウアーの思想の特徴

⑦思想の実現、「実現する」こと自体重要なことであった。だから、実現についての対話を重要視した。

⑧現実生活における過程へ人間的個人の実現に努力した。

⑨[illegible]への期待、その基礎としての人間生活を重視した。

⑩反戦・イスラエルでのアラブとの結びつきのための政治活動をした

⑪ユダヤのアラブ理解のための努力をした。―アラブ人との共同の国家を構想。

ブーバーの哲学はもう一つの哲学ではない。日常生活における実現への指示との対決をせきるものである。

「中国、ソ連型社会主義とコミュン型社会主義」

・現代社会へ市民社会、資本主義社会）の批判の目から考えていく時、ソ連、中国をどう見るかが大きなポイントである。

・連合赤軍の事件の総括の中で、「資本主義批判が足りなかったと言っているが、社会主義に対する幻想を取り、資本主義批判と同時に、スターリン主義批判をする必要がある。

・社会主義社会に対する判断点として言論の自由の保障（体制内で批判できるかどうか）地域的自治と職場労働者管理（中央の権力に対し、末端で自治ができるかどうか）を考える

・反スタは、制度の批判だけでなく意識革命が伴わなければならない。生活感覚の変革が重要である。

政治革命
（制度革命）
↓
社会革命
↓
意識革命

手探りのムラ

以前二・三度出会ったことがある。いつもその老人はダンボール箱を積みあげた車そうなリヤカーをひいていた。私のほうは下り坂、老人には登り坂。ただすれちがうだけなのだが、そのリヤカーのスピードはおそろしくおそい。身体をぐうっと前に倒して、ゆっくりゆっくりと足を運ぶ。私が思わず視線をあげるとそこには無表情な、と言うよりは無感情なひとつの顔があった。

何故だろうか、その時私には、生きること・への執着、人間の顔・がチラッと見えたようで、思わずハッとした。彼は毎日、ずっと以前からそうしているように仕事をし、仕事をすることに満足して床につく。いや満足しようがすまいが、彼は妻と子供と孫たちにひもじい思いをさせないためにリヤカーをひいている。ただそれだけのことである。

私がその時彼の一見表情のないような顔の中に、「何が何でも生きてやるゾ」といった言葉を読みとったとしても案外すんなりうなずけるのかもしれない。彼の中にはそんな日頃気づかないもう一つの顔があった。

× × ×

共同体のある横谷部落には、20代の若者はほとんどいない。彼らは都会へ流れだしてしまっている。そして彼らのいなくなった空間に、テレビや一日遅れの新聞、今年三月ようやく通じるようになった電話からの、映像や文字や声だけがふつうあいに沈澱している。そうここでもやはりこれまで何十年も繰り返されてきた日常がどっしりと幅をしめている。

毎年同じように米をつくり、毎日同じように働き、毎朝同じように有線のニュースが聞こえる。そんな中でいったい私は何をみようとしているのだろうか？　それはリヤカーの老人がもっていたもうひとつの顔なのかもしれない。

農村の、百姓たちの停滞したものごしの中で私は時々、さっと光のさすような瞬間にぶつかる。「田ばや

し太鼓凸を演じる百姓たちの楽しげな目は。芸術になる前の芸術・のすばらしさをはっきりと感じさせてくれる。向かいの徳田のばあさんのきづくりの梅干し、その紫蘇でそめた紅色は、彼女の中に百姓女の生命力がまだ確かに息づいているのを見せつけるかのようだ。

× × ×

私があのムラに生活して、現実に見て、聞いて、感じたそんなささいな事柄が私の中で渦を巻く。その渦は私の頭の中でふわっと大きくなりなかなか収束しそうにない。その渦の中に私が見ようとしているのは、五百年以上も前にその頃「土民」と呼ばれた百姓たちが路傍の石塊に彫りつけた権力に対する一つの宣言である。『正長元年ヨリサキ者カンヘ四カンカウニヲヨメアルヘカラス』畿内全域にわたる土一揆を展開し、（オレたちが背負わされてきたすべこの負債を破棄するゾ）と宣言する。そんな大胆な動きをくりひろげた百姓たちもまた、私の目の前にいる横谷部落の百姓たちと同じような日常を生きただろう。そしてあの老人のもう一つの顔と同じような目…。

× × ×

誰かが「横谷部落に『赤ちょうちん』をつくろうやないか。」と言い出した。

「毎晩カアちゃんと二人だけで酒を呑んでもおもしろないやん。部落のみんなと酒呑んでなんやかんやしゃべれる場所があったらええな。」

「うん、そんなとこから共同体ができるんちゃうかなあ！」

リヤカーの老人や百姓たちの顔、五百年前の百姓の宣言、そしてその弥栄の『赤ちょうちん』の発想。この三つが重なる時、私の中でムラはかすかながら呼吸を開始する。

こんなことを思う――ありきたりの人間のもつ、ありきたりの偉大さへの賭けをしよう。そんな気持ちで今、私はこの時点にいる。

（林田　悠紀子）